

附章 下老子笹川遺跡の天王山式土器

石川 日出志

本遺跡では、調査区東南部の包含層約15×10m程の範囲から、東北地方を主たる分布圏とする天王山式系統の土器が出土しており、北陸でのまとまった出土例として注目される。45点の拓本と写真を拝見した範囲内で読み取れた特徴と、そのことが示す問題の一端に触れよう。

天王山式土器は、福島県白河市天王山遺跡出土土器を標式として設定された土器形式で、東北地方一円から新潟県北部にかけて分布する。壺・甕・高杯・浅鉢・鉢・注口付・片口付などの器種があり、いずれも縄文を地文として細めの沈線で各種構図を描く。特に縄文はRLが主で条が縦走する例が多いことや、文様帯の境界部分に交互刺突文を施す、といった特徴がある。東北地方では弥生土器形式編年上の位置は確定済みだが、北陸と対比した場合に弥生中期後半、後期前半のいずれと考えるか、意見が分かれている(石川1990)。筆者は後期前半に中心があるかと考えるが、異なる見解が並立する主たる原因は、北陸で出土する天王山式が北陸在地土器のいずれと共伴するのか決定的な証拠を欠いているところにある。したがって、同じ遺跡で天王山式と北陸在地土器の両者が出土したとしても、はたして当時集落内で同時に共存していたのかさえ不確定である。このことはまた、天王山式という東北系統の土器をもちいた人々の南下がどのような背景に基づくのかという問題とも直結する。

下老子笹川遺跡で出土した天王山式系統の土器をみて気付くことの第一は、甕の頸部文様帯に重菱形文が明瞭な点(6～9・21～26)がある。これは中期後半の宇津ノ台式土器の伝統で、天王山式土器でも東北地方の日本海側に特徴的な構図である。また北陸の弥生土器とは異なる細かなハケメ調整も日本海側ないし新潟県北部にみられる手法である。ところで、この重菱形文には、描線が太くやや間隔があく一群と、描線が細く浅い密な一群とがあり、前者は秋田県はりま館遺跡など天王山式直前形式に、後者は典型天王山式に特徴的である(1990)。そして、描線が太い6～9では、典型天王山式で多用される頸部文様帯上下区画部の交互刺突がなく、7では頸部文様帯の下段には、天王山式特有の下開き連弧文ではなく、波状もしくは鋸歯状文が描かれている。5も、頸部は無文だが、頸部文様帯の区画線・下段は6～9と同様で、2～4もその延長線上で理解できる。つまり、天王山式直前に遡る可能性がある一群を含んでいることになる。胴部文様が明確なのは壺形土器の17～20だけである。17は横長の鼓形を重ねた構図どうしが接する部分を縦長のレンズ形とし、その中央に波状文を充填する。18・20が重弧文・平行線文の間に背中合せの弧線一対を配すことも、胴部文様帯上区画部に交互刺突を施文する点とともに、典型天王山式の特徴である。

次に口縁部をみると、文様帯区画部の交互刺突や口端の密な刻み、文様帯内の連弧文や波状文といった典型天王山式に合致する一群(11～16・19・21)と、交互刺突や口端外面の刻みがなく、口縁部文様も粗大ないし簡略化した一群(37～43)の2群があることに気付く。後者は新潟市六地山遺跡など典型天王山式土器に後続する一群に近い。したがって本遺跡出土の天王山式系統の土器は、形式学的には3段階にわたるものを含む可能性が高い。

天王山式系統の土器は北陸でも点々と確認されている。北陸南部の石川県加賀市大野山遺跡や、未発表ながら最近では福井県でも検出されており、さらに大阪府高槻市芝生遺跡では天王山式土器に特徴的なアメリカ式石鏃にアスファルトが付着した実例がある。大野山遺跡は破片が1点のみ採集されているが、その頸部には本遺跡21と同種の文様が描かれているように、北陸出土例はいずれも重菱形文が明瞭な東北日本海側の天王山式と共通する要素が明瞭である。また、石川県内出土例の多くは1遺跡で土器片が1～数点出土するのみなものに対して、富山県内では、本遺跡の北約5kmにある高岡市頭川遺跡(上野1974)や上市町飯坂遺跡、江上A・B遺跡(岸本ほか1982)、魚津市佐伯遺跡(上野ほか1985)など各所で十数～十数点出土している違いがある。このうち頭川遺跡の天王山式土器は東北方面と共通する例がほとんどである点で本遺跡と共通し、一方他の遺跡は器形と装飾に変容が認められる例を含んでいる。ただし、飯坂遺跡や江上B遺跡といった後者資料の多くは、口縁部文様帯下端に交互刺突の代わりに押圧を加え、文様帯に簡略化された文様を描く縄文のみの一群であって、いまだ六地山遺跡以外日本海側では実態が明らかでない踏瀬

大山段階（天王山式に後続）と関係する可能性もあり、ただちに存地化と判断してしまう訳にもいかない。また、佐伯遺跡では、天王山式直前と思われる例を含み、本遺跡が特異な事例でないことがわかる。

本遺跡の特徴として、天王山式系統の土器が北陸在地土器を伴わずほぼ単純な形で存在することが明らかな点も重要である。唯一甕の1のみが櫛描き文をもつ土器であるが、位置付けは容易ではない。櫛描き文であることから小松式と見てしまいがちであるが、頸部が「く」の字形に折れ、口縁が直線的に外傾する器形と、さらに櫛描き文も胴部上端に簾状文を1帯巡らし、その下に波状文を2帯置き、その波状文も鋸歯状を呈しており、小松式の範中を逸脱しているように思われる。小松式の簾状文は直線文と併用される率が圧倒的に高く、もちろん波状文や短斜線文や扇状文とも併用されるが、その場合は直線文も組合わせ、交互に配置するのが一般的である。簾状文の下に波状文を重ねる構図がもっとも多用されるのは中部高地北部の中期後半の栗林式で～後期の箱清水式で、口唇部に縄文や刻みがないことと口縁部が短い点は後期初頭の吉田式～箱清水式の古い部分あたりに近い。しかし鋸歯状の波状文は中部高地にはみられず、新潟北部の山草荷式の甕に似た例があるものの、それでは今後は簾状文を小松式要素の取り込みと見なければならなくなる。難しい土器である。しかし、この一点以外すべて天王山式系統の土器である。北陸中部で天王山式系統の土器が主体を占める例として本遺跡が特異な例であるようにみえる。しかしそれは、従来先験的に北陸在地土器に伴うであろうと見ていたがためのことであって、典型天王山式を後期初めと考える立場から資料をみると、頭川遺跡・飯坂遺跡なども天王山式系土器単純の段階があると考えられることもできる。

北陸の土器とは形式的にまったく繋りのないこれら東北系土器が出土する背景には、これをもちいた人々の彼地からの移動が考えられる。北陸地方に広く検出例があり、土器が数段階にわたる可能性が高いことは、天王山系集団の移動が偶発的なのではなくて、恒常的・継続的であったことを示している。しかし土器の出土量が少ないからそれは小規模であって、集団移住といった性格のものよりもむしろ交易といった経済活動の一環と考えるべきであろう。天王山式土器が中期後半、後期前半のいずれであろうと、東日本の広い範囲を含めて鉄製品が急速に普及し、物資の広域流通機構が整備されていく段階にあたっている。中期後半には北陸産の碧玉質凝灰岩・鉄石英製管玉が東北地方から北海道の石狩低地まで広く普及しているし、小松式土器の要素も東北の日本海側を中心に組み込まれている。こうした北陸側の働きかけに対する対応のひとつとして天王山式土器の南下現象を理解することができると考える。

では、北陸在来の集団とはどのような関係だったのであろうか。頭川遺跡と本遺跡では天王山式がほぼ単純に出土しており、北陸在来集団の村落内の一角に外来の交易者が住まう状況とは異なるように思える。ただ、この問題を解くには、北陸在来土器との編年対比の確定はもちろん、天王山式系統の土器が各遺跡でどのような存在の仕方をするのか、天王山併行期の在地集団の集落景観の把握などを入念に進めていく必要がある。

天王山式系統の土器の北陸地方への進出は、弥生時代後半期における日本海沿いを舞台とした広域にわたる活動のひとつとして、興味ある問題である。

[注1] ただし破片数でなく、個体識別したうえで比較しても、有為の差異があるかは今後の検討課題である。

[参考文献]

- 石川日出志 1990 「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』3、pp.1-20.
上野 章 1974 「高岡市頭川遺跡」『大境』5、pp.56-68.
上野章ほか 1985 『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第7次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会.
岸本雅敏・久々忠義・橋本正春ほか 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告：上市町土器・石器編』富山県教育委員会.